

高齢社会のライフスタイル

石津謙介* 犬養智子**
 斎藤茂太*** 矢野雅文**** 小林 實*****

わが国は、すでに高齢社会に入り、ここ数年さまざまな場面で高齢社会に関する問題が取り上げられ、多くの議論が行われている。しかし、その多くは、高齢者をいかに現在の社会システムに適応させていくかといった、時には高齢者にとって不都合を強いられるようなものでもある。今回は、高齢者を含んだひとつの社会システムをどう巧く機能させていくかといった社会システムそのものの変革、また、高齢者がいかに積極的に、快適に、楽しく社会に参画していくかといった課題について、検討した。

Living in An Aged Society

Kensuke ISHIZU* Tomoko INUKAI**
 Shigeta SAITO*** Masafumi YANO**** Minoru KOBAYASHI*****

Having already entered an aged society, Japan has been confronted with the problems of an ageing society in numerous areas in recent years and a great deal of discussion continues. However, much of this discussion is on how to get the elderly to adapt to the existing social system and the inconvenience which this sometimes causes the elderly. This symposium examines how to change the social system to an integrated one that incorporates functions for the elderly and how they can actively participate in a comfortable, enjoyable society.

ドライバー現役2名、運転免許証現役1名

小林(司会) お忙しいところご出席いただき、ありがとうございます。今日は「高齢社会と交通」という特集に関連して、「高齢社会のライフスタイル」ということで、ご自由に忌憚のないご意見を聞かせていただきたいと思います。

日本ではかなり高齢化が進んでいて、もはや「高齢化社会」というより「高齢社会」という認識が必要、という話も聞きます。一方で、社会全体は国際化、都市化が進み、技術の高度化が進んでいる。これと高齢社会をどうリンクしていくのか。

そこで大先輩であるご出席の先生方に、思い切ったご意見をぜひうかがいたいのですが。

* ファッションプロデューサー
 Fashion Producer
 ** 評論家
 Freelance Journalist
 *** 斎藤病院名誉院長
 Director Emeritus, Saito Hospital

**** 東北大学電気通信研究所教授
 Professor, Research Institute of
 Electrical Communication, Tohoku Univ.
 ***** 国際交通安全学会主任研究員
 Senior Researcher, IA TSS
 1994年7月20日実施



斎藤 これは、どうなの、『中央公論』でいえば、巻頭随筆の感じでいいんでしょう。

犬養 そうですね。

斎藤 気楽な。

小林 そうですね。堅い話は論文に任せて…。皮切といっちはなんですが、みなさん運転なさると思いますが、そのあたりのことから。

石津 僕は、四谷から青山のオフィスまで、毎日車で通っています。隣にかみさん乗っけて。帰りはタクシーで帰る、車置いて。

犬養 じゃ次の日の朝は？

石津 またタクシーになっちゃう。もうこの歳だから、「飲んで乗るのは危ないぞ」とよく人に言われるから。

犬養 それはそうです。飲んで乗ったら、年齢と関係なく危ないわ(笑)。

石津 だから乗らないようにしてるんですが、そうすると朝乗っていった車をオフィスに置いていく時はいいんですが、どこか行った先で飲むことになるとそこに置きっ放しにして帰るでしょう。さあ、そうすると翌日困る。どこに置いたんだか(笑)。

矢野 よほどお飲みになるんですね。

石津 いやあ、あまり飲まなくても忘れる。もう痴呆症ですね。

斎藤 自分で痴呆症だ、という痴呆症の人はいませんよ。

犬養 いつも方々で飲んでらっしゃるみたいですね(笑)。

石津 僕ははしが好きなものですから。

犬養 それならもう、絶対タクシーね。

石津 そうなんです。そうするとだんだんタクシーの方が楽になってきて。

犬養 そう。運転手がいるというのは楽です。他人任せというのは。それに乗り捨ててもできるしね。でも私は絶対に自分の車で出かけた人間なんです。というのは待つのがいやなのね、タクシー。それとイヤな運転手に遭うのがいやなの。京都なんかはいタクシー会社があるんですけど、東京のは不愉快になることの方が多いから。急いでいる時に限って来ないし。だから絶対にセルフドライブです。

矢野 お付き合いでお酒、という時はどうされますか。

犬養 飲みませんよ、車で行ったら。パーティなんかでも、絶対飲まない。だから、2万円くらいの会費のパーティなんてあるでしょう、そこでも何も食べないで飲まないで、本当にいるだけ、空気だけで2万円、という感じで帰ってきますけど。

小林 斎藤先生は、運転は？

斎藤 前に、運転に年齢制限しようとかなんとか、そういう話がありましたよね。その時、私は年齢制限にすべきではない、と反対したんです。

石津 それは免許証のですか。

斎藤 そうそう。90歳以上は与えるとか、いろいろ話があったようなので、それに反対して、年齢云々じゃなくて、これはあくまで自分の意思でやめるべきだと。で、現に僕はやめたんです。

犬養 ああそうですか。いくつの時に？

斎藤 3年前から。

犬養 おいくつで？

斎藤 今？

犬養 ええ。
 斎藤 男性に歳聞いてもいいんですか (笑)。
 犬養 でも、この際。
 斎藤 今78歳半ですけど。
 犬養 じゃ、75くらいでおやめになった。なるほど。
 矢野 なにかやめようと思われたきっかけがあたりだったんですか。
 斎藤 最初は夜、対向車の光がとてもまぶしくなってきた、これはいかんと思って。
 でも免許証の更新だけは続けてます。いくつまでパスするのか、チャレンジのつもりで。
 小林 それはいいですねえ。
 石津 しかし試験があるわけじゃないでしょう。
 斎藤 いや、試験ですよ。
 犬養 眼鏡ですよ、目の。
 石津 ああ、目の試験か。
 斎藤 まあなんとかパスしてんです。いくつまで取れるかが、興味の対象ですね。
 犬養 公表なさっていただきたいわ、それ。
 斎藤 とにかく、人に制限されるよりは、自分の歳相応の状況を認識して、自分で判断したいから。それに歳の取り方って個人差があるからね。でも、イザって時は、むろん運転するつもりですよ。
 犬養 私もそれには賛成。国家権力で制限するなんて絶対反対。個人個人が自分の能力に応じて決めることだと思います。20歳だって運転不適格者っているわけでもの。反対に90歳でもしっかりしている人もいるだろうし。アメリカでは90歳ぐらいでジェット機を操縦する人がいて、100歳になっても乗ると言っているそうですから。ほんとに個人によってちがうんですから。

高齢者を別扱いしたがる社会

矢野 日本の場合は「高齢社会」と言って、高齢者を普通の社会から差別化するんですね。
 犬養 そう、差別するの。
 矢野 だからネットワークからとにかく外してしまうという考え方で進める。外してしまってから、どうやってケアしようか、という発想だと思うんです。
 犬養 要するに異人種だと思ってる。
 矢野 でも人間というのはそういうふうでは生きていけない。むしろそのネットワークにどうやって組み込んでいくか、ということを考えてもらわないといけない。そういう視点からもう一度見直すことが

必要になっていると思いますが。
 犬養 運転のことを例にとつて言えば、日本というのは、自動車に関してはまだ発展途上国でしょう。つまり多くの人が一代目のドライバーですよ。外国だったら私の年齢でも二代目どころか、三代目というところもある。だから年とった人が運転するというのが当然の社会で、しかも道路状況もいいし、割とマナーもいいし、日本みたいに過密じゃない。考え方自体ちがうと思う。やっぱりドライビング先進国の、例えばドイツなんかの方法を学ぶべきだと思います。

小林 例えば石津先生、運転していてそういう感じはありますか、じゃまされてるとか…。
 石津 もう平気になってますけど、外国へ行ったりすると感じますね。ああ、やっぱりちがうな、と。
 犬養 私の姉が年齢よりずっと若くて、外国旅行大好き、ブリッジ大好き。それに昔からスピード狂だったんですけど、やっぱり最近はずっくり走ってますね、見てると。それから叔母はカソリックの尼さんなんですけど、やっぱりノロノロ運転している。年齢に応じてゆっくりになってくるものなんですよ。だから、そういうドライバーとちゃんと共生できるような車社会にならないと。
 矢野 ここでも囲い込みの発想がじゃましてるわけですね。
 犬養 だいたい社会全体が、年とることはだめなことだ、年とるとだめになる、なんていう感じでしょう。年とると脳細胞がどんどん死んでいくなんで、あれは理論としてまちがってるんですって。むしろ人間の判断というものは総合的なものだから、それはずっと伸びていくでしょ。そっちの理論を重視した方がいいと思うの。でないと年とるといって何の楽しみもないことになる。灰色になっちゃうじゃないですか？

あちらこちらの不親切

小林 道路の上のことだけじゃなくて、例えば住宅とかも階段のきつさとか、どうも高齢者向きにできてない部分が多い、という話がよくあるんですが、そのへんはいかがですか。
 犬養 優しく、なんていう言葉が流行ってるけど、全然優しくない社会ですね。とくに老人に対して優しくない。

高齢社会ですごく大事な事が二つあると思います。まず基本的には「エンジョイ・ライフ」の哲学です

けれど、その上に「ソーシャル・ミックス」と「バリア・フリー」の二つのノウハウが必要。つまり、高齢者だけを囲い込みに入れるんじゃなく、あらゆる年齢の人といっしょにしていることですね。それからバリアが、日本には多すぎる。地下鉄にエスカレーターがないとか、駅に行ったら赤帽がないとか。

石津 あれはどうして？ 旅行社がやるから赤帽は置くな、といってるの？

犬養 私が調べたところでは、そうじゃなくて、結局、後継者がいないの。JRが後継者を育てる努力をしてないんです。身分保障して月給をきちんと給付して、地位を確立してあげればいいんだけど、それに制服をもっとおしゃれにするとかね。今は職人的にやっていて、身分もはっきりしてないでしょう。だからいないのよ。

斎藤 ニーズはあるのにな、ニーズは。

小林 外人なんか、ほんとに困ってますよね。

斎藤 新幹線で、大きなバッグを入れるところがないじゃない。

犬養 ないの。旧型のひかりにはあったのに。

斎藤 あれは最悪だな。困っちゃってうろろうしてる外人、いますよね、大きいの持って。

石津 昔はあったのになあ。

犬養 JRの上のほうの人なんか、働きバチだろうから、そういう男の人には分からないかもしれないですね。一度ご自身が大きな荷物持って、女の方と旅行してみるといいのよ。荷物が多いうことがどういうことか、分かるはず。

斎藤 小さなボストンぐらいいで旅行することしか頭に浮かばないんだな、きっと。

小林 それは行政サイドでもそうですよ。交通安全の話をしたって、自分が車の後ろにふんぞりかえって乗っているから、運転者の心理なんか分からない。

犬養 そう。あの運転手に黒塗りの車で移動している人には、交通問題を語る資格は絶対ないわ。

小林 これは余談ですが、JR東日本が救急処置を正社員に学ばせることになったんです。駅で倒れる人がいても今までは救急車が来るまで待っていたんですが、それでは間に合わない場合もある。それで、救急法を学んで対処できるようにした。こういう対応はうれしいですね。

斎藤 高齢社会にマッチしてきたな(笑)。

犬養 でも、私、駅の階段についてもっと考えてほしいと思います。エスカレーター、ほとんどないでしょう。それに今は駅員もホームにいないから、お



石津謙介氏

年寄りや障害のある人はほんとに困っている。

石津 いてほしい時には、絶対いないな、駅員。

斎藤 成田エクスプレスが新宿駅に着くでしょう。みんな大きな荷物持ってゴットンゴットン階段降りてくる。エスカレーターも赤帽もない。

犬養 だから、どうも日本というのは、屈強の男の出張族に全部、都市のつくりが合っているんだと思う。だから霞が関の地下鉄にはエスカレーターがある。一方、郊外の、例えば田園調布とか広尾にあるかといったら、ないんですよ。せっかく老人優遇のバスがもらえても、老人は乗れない、階段の上り下りがあるから。

石津 交通関係の人が、いちばん高齢者のこと、分かってないかもしれないな。

犬養 政策立案者は、上京してきて、自分の親を郷里に置いてる人だと思うの。親といっしょに住んでたら、絶対分かります。私も父親のヘルプをするようになって、ほんとうに日本というのはだめだと思った。だれか親身の人間がついてなかったら、年をとったらいられないですよ、愉快には。

矢野 お父様は今、おいくつですか。

犬養 96歳です。しっかりしてるんですよ。足は大分よろよろしてて、介助なしではムリだけど、でもちゃんと出かけるの。それがすごいんです。ご飯を食べに行く趣味があるんですが、とにかく冬までは毎日必ず、お昼を食べに出てた。しかも行くところは決まっているのね。

斎藤 メニューもいっしょ？

犬養 いいえ、和食は和食ですけど、メニューはいろいろ変えています。

斎藤 それならいいですね。それは身体にとって大事。

犬養 それが、だれかが必ず行かなくちゃいけないから、アテンドがたいへんなの、やっぱり。週5日



齋藤茂木氏

とか6日になると。でも見てて思うんですけど、年とったからやめて下さいとか、そういうの、通用しないですよ。こっちの都合ですからね。それにだいたい、年とると、頑固になるでしょう。

齋藤 なるなる。頑固に。ほんと。

犬養 ある特徴が強く出てくるというか。

齋藤 あります、あります。

犬養 それもある上に、自分の欲望に対してはものすごくなっちゃうんですよ。欲しいと思ったら待たないとか。行きたいとなったら、すぐ出かけないといやだ、とか。で、子どもたちで交代でアテンドです。

齋藤 頑なになるんですね。わかる、わかる。「おれは豆腐しか食べない」と言い出したら、これはいけませんね。動脈硬化がかなり進んでいます。一つのものにこだわって、ひじょうに視野が狭くなってしまふ。でもそこまでいってらっしゃらないようですから、大丈夫です(笑)。

例えばけもの道みたいなものがあるんですよ、どんなことがあってもそこを通るんだ、という…。

犬養 それは行動のパターンですか。

齋藤 いや、年齢による、動脈硬化みたいな状況。

石津 道が決まってるってこと？ 自分の通る道が？

齋藤 ええ、けもの道と言ってるんだけど。

石津 動脈硬化と関係あるの？

齋藤 そういう説。環境に適應した融通性が低下してくる。

石津 僕は、毎日オフィスまでの道、決まってるけど。行き道は迎賓館のところから権田原へ出て。帰りは国立競技場の前をずっと通ってくる。

齋藤 決まってるんですか。

石津 決まっているんです。それから、真鶴へ行く時も、道はずっと決まってる。その道でないとか、

安心できない。

齋藤 なるほど。でも、今日サミットかなんかがあつて、ということで通れなかったら、ちがう道を通るでしょう？

石津 それはしょうがないから。それに、そういう時はタクシーにしちゃう。

齋藤 それなら大丈夫。

犬養 動脈硬化じゃないわけね。

齋藤 ないわけ。そうです。

犬養 要するに、だれだって自分で見つけた、いちばんいい道というのはあるわけだから。

齋藤 そう。

犬養 動脈硬化までいっちゃったら問題だけど、ふつうの年寄りにも、付き合えない、という社会になつてる。日本は敬老でなくて、嫌老社会ね。

自立性・自主性のない国民性がネックに

矢野 社会を構成する人間が自立性を持っている、ということがいちばん大事だということはないが、しろにしているんですよ。年をとっていくと、体力や気力の低下と同じように、自立性を保つ能力も落ちていく。それをサポートする方向に社会が動けばいいんですが、そうじゃない。能力が落ちたんだから、もういいよ、じっとしててくれ、という方向にいつてしまう。

サポートの方法も、ハードウェア、ソフトウェアの両面から必要ですが、なかなか…。そうやっていったほうが、社会としては、ものすごく安定するんですがね。とくにソフトウェアは人間主役でやらなくちゃならないから、難しい。

犬養 それで、おかしいのがね、今、高齢者福祉財団みたいなのが各地にできていよう、半官半民みたいな。それで私、あるところに講演に行ったら、舞台上に風船がいっぱいあって、きれいだったの。で、「この風船、楽しくていいですね」って冒頭に言ったら、あとで主催者の人が、「よくぞ言ってくれました」って。「どうしてですか」って聞いたら、その風船を飾る時に県の方から、老人相手の行事だからもっと地味にしたほうがいい、福祉事業の一環だし、って言われたんだって。行政の方はまだ、老人だから地味に、なんて考えてるのよ。

石津 年とったからかえって明るくしないとだめなのに、わかってないな。だいたい、年寄り、というとすぐ、交通の階段とか、医療とかベッドとか、そういうものを与えておけばいいんだと思っている。

そのうえ、最後は別の隔離病棟へいれちゃって、そこで何をするか、ということしか考えてない。病人でもなんでもないのでね。

犬養 そう。老人だから弱者、という観念しかないのよ。私は「シルバー」って言葉自体が間違っていると思うの。それで私は「ブロンズエイジ」という言葉を作ったんです。考古学の青銅期じゃなくて、熟年とか実年とかあるでしょう。それより上の人のことを呼びたいんです。日焼けもブロンズの肌、とか言うし、彫刻でブロンズってあるし、強そうでカッコいいじゃありませんか。

石津 うん、それ、流行らせてやろう。

斎藤 中年以上はみんな、ブロンズって言うていいの？

犬養 微妙なのは上限をどこにするかなんですよ。50歳から74歳ぐらいまではブロンズでいいと思う。75から80くらいになって初めてシルバーでいい。シルバーも弱々しいから、ゴールドの方がいいけど。シルバーって呼び名を被った途端に、本人も弱々しくなっちゃう。けど、ブロンズと言ってる限りは、私は現役なんだ、と思える。それこそ恋だろうとなんだらうとできる気がするでしょ。だからあちこちで言うてるの、ブロンズにしましょうって。

矢野 そうやってどんどん籠を外して行ってやらないといけませんね。だいたい、日本は子どものころから、籠をはめすぎる。だから外から与えられないと安心しない、という習性がついてしまう。別の見方をすれば、籠というのは一種の目的にも通じるものですから、うまく自分ではめられればいいんですけど、その方法が分からない。

犬養 かえて命令されたほうがいいのね、今の若い人たちは。

矢野 そのほうが安心するんです。この老人問題、高齡社会の問題も同じところでずっとつながっていくんです。だからなかなか解決しない。

石津 僕なんかファッション屋みたいに言われるんですけど、ファッションとは何かと言ったら、人を騙すことだ。あんたたちのような訳の分からない人たちをこちらに動かして「これがいいですよ」と言って、それをさせることだと。何か作って「これが今年の流行です」と言ったらみんなお金持ってワーッと集まってくる国って、日本くらいのもんです。それで適当なところでぼしゅらせて次のものを出す。だからビジネスする人にとってこんな結構なことはないんです。ファッションビジネスというのはこん



犬養智子氏

なビジネスなんですよ、もうほとんど詐欺(笑)。

犬養 でも、騙されるのを好む人たちもいるわけだから。

石津 それで安心する人のほうが多いんだよね、みんなと同じにこれを着ていれば、安心という…。

斎藤 男の団体旅行で海外行くのなんか、みんな同じゴルフ帽みたいのを被っているでしょう。あれ、おかしいよね。遊びの時の恰好はだいたいゴルフの時の恰好。いちばんカッコいいと思ってるのかなあ。個性がないよねえ。

犬養 なんか不気味ですね。みんな同じ恰好をして平気というのは、全体主義の一つの現われだから。結局、個ができてないからですよ。

小林 そのへんはかなりちがいますか、例えばアメリカやヨーロッパと。

犬養 それは、全然ちがう。

今の車に、もの申す

石津 だって車でもそうじゃないですか。どうして日本の車って、どれもこれも、みんな同じ形になるの？

犬養 みんな白だしね。昔は黒で、今は白。

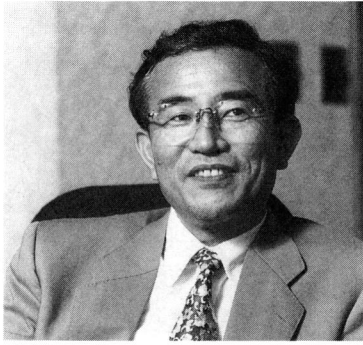
石津 それと不思議なことには、新聞の広告見ると、車のエンジンがどれくらいとか、どういう性能とかは全然書いてないの。

小林 書いてあるのは、値段と形くらいですか。

石津 ああいうふうには形がよければ買う、というのも僕はいやだな。そう思って買った同じような人が同じ形の車に乗って行くんだよ。

小林 何かデザイナーとして、こういうところはこうあってほしい、とかこうあるべきだ、とかおありですか。

石津 いや、僕はひじょうに順応性が強いんです、いろいろ言ってますけど(笑)。この車を見てこれが



矢野雅文氏

いいと思ったら、乗ってみて不満なところがあっても「これはこうなんだ」と思っちゃう。家でも食べ物でも。

矢野 さっきの年とると頑固になる、というのと反対で、気持ちがお若いんですね。

斎藤 日本の車は虚飾が多過ぎるように思うけど。

犬養 そうね、多過ぎるわね。

斎藤 肝心の性能や機能より、なんかじゃらじゃら、これが多い。そういうのを望む人もいるんだろうけど、もう要らないですね、あんな虚飾は。

犬養 だからようやく最近、ベーシックな自動車が安く出て売れ始めた、って一生懸命記事にしてるわね。そんなの昔から決まっていることで、いろんな小道具なしにして安くして、そのかわりによく走る。エンジン性能がよくてスピードが出ることを追求した車をもっと造るべきよ。

私は1970年代にワーゲンのパサートというのを買ったんです。当時割といい恰好の車で、割と安かった。それはもう走ることだけを考えている車で、もちろんロール式のウィンドウだし、なにもついてない。でもスピードは出るし。夏はエアコンなしだから、乗った途端に汗かく、って感じだったけど。

斎藤 当時、日本の車ならエアコン付でパワーウィンドウがふつうでしょうね。

それと、あれも要らないな、オートドア。

犬養 オートドア？

斎藤 ほら、閉まっちゃうやつ。

小林 自動ロックですか。

斎藤 自動ロック、そうそう。

犬養 ああ、いらない、いらない。全然要りません。

斎藤 あんなものがあるから、人間というのは忘れっぽいからキーを中に入れたまま閉めちゃうんだ。

犬養 あれ、かえってすごく危ないと思いますよ。事故なんかあった時に自分でドア開けてすぐ出られ

ないから。あんなばかなことやってるの、日本車だけじゃありません？

斎藤 ベンツなんかないでしょう。ドイツは合理的だから。

犬養 ドイツ車は自分でかけない限り、鍵はかからない。自動ロックなんて、ドライバーが操作しない限り開かないでしょう。私、姉の車なんか乗ると、自由に降りられなくて怖いもの。タクシーの発想ですよ。乗る人の自主性を全く尊重してない。

石津 僕は最近考えるんですけど、車の快適さとは何だろうか。スピードが出ること？僕はスピードなんかは必要ないと思うんですよ。決められているんだから、それ以下でいい。

小林 昔はもっとお出しになったようですが(笑)。

石津 まあね。東名でレースやったりした。25年前だけだね。

斎藤 若いころですねえ。

石津 まだ東名も空いててね。200キロくらいで。

レーサーの式場ってのとやったの。まあ昔はそんなだったけど。僕は飛行機もグライダーもやるからね。

斎藤 グライダーの先駆者ですよ、石津さんは。

石津 だから、スピードのことに關しては、車のスピードなんか大したことないって思うわけ。スピード感じたいなら、空へ行くべきだ(笑)。

老人よ、自分自身を縛るべからず

小林 しかし、いずれにしてもお元気ですね。まるでギャング団だな、これは(笑)。

矢野 たくましいブロンズエイジを実践する、という感じですね。

犬養 さっき、行政側の観念が古すぎる、って言ったけど、お年寄り本人の意識もけっこう古いままなのね。年齢相応にする必要なか、全然ないのよ。例えば、なぜかタイヤした人って、出かける時に登山帽みたいなのを被る。いるでしょう、そういう男女。だいたい帽子というのはセクシーになるために被るものなのに、男も女もあんなもの被ったらだめよ。

石津 それでセクシーになる、と思ってるのかな。

斎藤 それはちがうでしょう。

犬養 それにね、東京新聞にグッズを紹介して勧めるコラムがあって、うちの娘も書いてるのね。そこでリバーシブルになったきれいな帽子を取り上げたの。「ベルモード」なのに割と安いもので。そしたら問い合わせの電話がお店にずいぶんかかってきた

んですって。それがおかしいの。「私は50歳ですけど、被っていいでしょうか」「私は70歳ですが、どうでしょう」。自分である年齢になったらこれをしてはいけない、あれをしてはいけない、ってタブーがまだまだあるんですよ。

石津 ああ、そうか。それで…。僕のところによくくるのは、たいていお年寄りのおしゃれについて、という話なんです。

犬養 そうなの、おしゃれを大いに勧めなくちゃいけないのよ。

石津 それで僕なんか引っぱり出されるわけだ。僕はたいていこう言うんです。「あなたたち、おしゃれにするんだったら、何を着てもいいんだから。何を着ちゃいけない、というものは全然ない。年寄りだから地味な色にする、というものないし、かといって年寄りだから赤を着る、というものない。どうせあまり長くないんだから、人のこと、考えることないですよ」って(笑)。ずばりと言うと、安心するみたい。

あと、そういう時にいちばんの禁句は、セックスの話だね。

斎藤 へえ。逆だよ。もっと好意的に解釈しないとだめだなあ。

石津 ねえ。

斎藤 年とったからセックスはおしまいってわけじゃない。握手するだけでも一種のセックスなんだから。

犬養 年とったって、異性と話したい、とかいう気持ちはあるわけでものね。

石津 僕は今でもガールフレンドは何人かいますよ。でもそれはセックスフレンドではないわけ。そんなこととは別に、異性欲というものはあるわけ。

犬養 異性欲ね。性欲というと生々しいけど、そういうんじゃない、もっとファンタジックな…。

斎藤 それがなくなったらおしまいですよ。

犬養 私、ゲートボールやるよりも、ダンスパーティーやティーパーティーをすべきだと思うわ。日本人がこれだけ寿命が延びても、その割に楽しそうな顔してない、というのは、世相だけじゃなくて、そのあたりにも原因があるような気がする。イタリア人なんて、美味しいもの食べて、のんきで、ケセラセラで、男と女の仲が良くて、楽しそうよ。家族や文化の問題がなかったら、イタリアに住んだほうが幸せかもしれない。

石津 だいたい、セックスという言葉だけで過剰反



小林 實氏

応しちゃうんだから、じょうずに遊べないんだよ。いや、女性と遊ぶとかそういうことだけじゃなくて、もっと一般的な遊び(笑)。

僕は、高齢者というのはいつもレジャーライフでなければいけないと思うんです。今の日本では、ふだんよっぽど苦勞した人が、やっとほっとしてそのひとときを楽しもうとするから、金はたくさんあって、いちばん高いところへ行って金を使って、それからまた一生懸命に働こうという、そういうレジャーしかない。それはレジャーとは呼ばないんだ。例えばハウステンボスなんか、初めはよかったのに、今はもうだめです、いろんな団体がドーッと来て、「遊び道具がないじゃないか」とか「食べ物がまずい」とか、「オランダは好きじゃない」とか…。

犬養 何か施設が欲しいわけなのね。

石津 そう、あのぐるぐる回るのとか、コースターとかがないとレジャーと思ってないんです。

犬養 レジャーの日本的特徴というのは、やっぱり年中何かしてないとおさまらない、というところにあるんでしょうね。

斎藤 それから、いつも何かが聞こえていることかな、しょっちゅう流行歌なんかが流れてないと、落ち着かない。

犬養 軽井沢のホテルなんかでも、いいお庭があって、でもデッキチェアが1台も置いてない。テラスにテーブルと椅子が1個もない。でもだれも文句言わないの、みなさん、テニスとゴルフと自転車で走り回って忙しいから帰ってきたらご飯食べてテレビみて寝ちゃうの。あれは日本のリゾートホテルの一つの特徴だなと思ってるんです。

斎藤 それと似てるかな。僕、日本郵船の飛鳥という船の応援団なんですけれど、最初、プールサイドにずらっとチェアを置いた。でも半分も使わないんですって、日本人は。

犬養 あそこでデレっとしてない。

斎藤 ゆうゆうと日向ぼっこして本読んで楽しむ、
というのはだめなんだって、日本人は。

石津 どうしてるの？ 泳いでる？

斎藤 部屋でテレビ見てるって。

犬養 出てこないんですか？

斎藤 出てこない。のんびりする、ということがない。

石津 年とってもレジャーもできないわけだ。

斎藤 しかし、テレビっていうと、スタジオに老人
がいっぱい並んで出るのがあるでしょう。老人ホーム
なんかから連れてこられたのかな。この人たちが、
にこりもしないの。こっちで漫才やったりどたば
たやったりしてるのに。あれで楽しいのかしら。

小林 笑いが少ない？

斎藤 まるで笑ったら損みたい（笑）。無理してで
ても笑わないと、だめなんだけどなあ、自己暗示にか
かってるんだな、笑っちゃいかん、と。まあ、昔の
人は、白い歯を人に見せるな、と言いましたがねえ。

悟りを開く、というアメニティ

石津 僕は高齢者ですよ、その僕が生活しやすく
するために、アメニティを考える。周りの人にも考
えてもらう。でも、実生活でのアメニティなんて、
ほんとは小さなことなのかもしれないんです。いち
ぼんのアメニティは何かと言ったら、人生に対する
強い欲を捨てるということだと思っんです。僕たち、
ありがたいことになんとか平均寿命まで生き延びて
こられた。もう生きることを考えないことですよ、
いつ死んでもいい、そういう気持ちになったら、こ
んなに楽なことはない。

斎藤 そうそう、いつ死んでもいいと。

小林 ということは、不安感はない、と。

石津 僕は会社が潰れた時に、悟り、開いちゃった
（笑）。人間、生きていくのに、どうしても必要なも
のはそんなに多くない。その上に年とっちゃったか
ら、長生き欲もなくなってきた。もう怖いものなし
だ（笑）。

斎藤 石津大僧正だな（笑）。

犬養 でも、悟りは必要だけど、自然と、気持ち良
く悟れる環境が必要よ。無理やり悟らされたんじゃ
あ（笑）。

最後に一言、せっかく交通の学会誌なんだから、
交通のことについて付け加えておきたいんですが、
どうしても大切なことが、二つあると思って。一つ
は、やっぱり移動の自由というのはクオリティー・
オブ・ライフの一つだと思うんです。そのためには
公共交通機関が発達して、アクセスがよくて、バリア
フリーでなければいけないと思う。それから、
車社会という限りは、高齢者の運転も年齢制限を上
から押しつけるんじゃなくて、ドライバーの自主性
に任せるべきということ。それには、老人も運転で
きるような交通環境を作るために、ドライバーの教
育が必要不可欠。

斎藤 年齢に応じた交通講習会みたいなのがあると
いいね。高齢ドライバーといってもいろいろなキャ
ラクターがあるだろうけど、自信過剰な危険な人も
いるだろうし。

小林 高齢社会、高齢ドライバー問題など、なんと
いってもみなさん方ご自身のご体験に基づいたお話
をうかがえたことが、ひじょうに貴重だったと思
います。最後は犬養さんにまとめまでやっていただき
まして（笑）。

今日は本当にありがとうございました。